日本福祉大学福祉社会開発研究所『日本福祉大学研究紀要－現代と文化』
第118号　2008年12月

＜資料翻訳・解説＞

『グラムシ，クローチェそして科学』

デレク・ブースマン 著
福　田　静　夫　訳

出典；*Derek Boothman,* Gramsci, Croce e la scienza, a cura di R.Giacomini, D. Losurdo, M. Martelli, La Citta del Sole, 1994)

目次

1．はじめに
2．グラムシとマルクスにおける科学とテクノロジー
3．実証主義に対する批判：グラムシとフランクフルト学派
4．イタリアにおける科学への批判：宗教と観念論
5．グラムシとクローチェ：二つの対立するパラダイム
6．グラムシ：科学の現実主義的な哲学者
7．神秘主義に反対して

1．はじめに

科学に関するアントニオ・グラムシ【Antonio Gramschi 1894-1937】の考えは――この場合の「科学」というのは，ここでは，とりわけ自然科学，それも精密科学のことを指している――その大部分が見過ごされたままになっている．こうした見過ごしが起こったことについては，これまでのところ，主として科学を無視してきたイタリアの支配的な文化のせいであったように思える．この問題に関連して，ピエーロ・スラッファ【Piero Sraffa 1898-1983】は，グラムシの義姉であるタチアーナ・シュフト【Tatiana Schucht 1888-1943】に宛てて手紙を書き，グラムシの注意を喚起している．

イタリア人たちすべての文化には，いかにも奇妙な事実があります．イタリア人たちの文化には，大きな穴があるのではないか，ということです．クローチェは，極端ではあるにし

ても，典型的な事例なのです．哲学者たちは，もしも科学者たちに哲学の試験を受けさせてみたなら，科学者たちが不合格になったのは間違いあるまい，と信じているのです．こうした次第で，自然諸科学は，実証主義者たちの関心にゆだねられたままになっているのですが，その結果は十分ご承知の通りです[1]．

ここに示されているようなイタリア文化の科学についての一般的な無関心さとは別に，グラムシの科学の概念を読み取るのを困難にしているものに，もう一つの原因がある．それは，『獄中ノート』の第 11 ノートのいくつかのパラグラフをはじめとして，科学の本性についてのグラムシの諸々のコメントが，さまざまな場所に散在していることである（ブハーリン【Nikolai Bukharin 1888-1938】に関してとか，あるいは「科学と“科学的”イデオロギー」とか「思考の論理的道具」といった特殊な見出しがついているのである）．そうしたパラグラフのなかには，経済学に関する論議のうちに隠れているものもあって，この種の文章は，戦後の最初の何十年間かにわたってイタリアの左翼の文化が経済学に弱かったために，見過ごされたままになってしまったのである．

それでも，科学に関するさまざまなメモが広い範囲にわたって考慮されるようになったところで，私の見るところでは，あるまとまりをもった展望が立ち現われてきているようである．ここに描き出されたひとまとまりの構図を，他の（マルクス主義的なものやそうでない）思想的な潮流の代表者たちによって発展させられた諸々の知見と対質させることで，グラムシと他の人々との間の類似の立場とか，異った立場とかいったものを確認することが可能になる．そしてこのような立場の異同を通して，現実主義的／唯物論的な認識論 una epistemologia realista／materialista についてのいくつかの確定的な論点が明らかになっていくのである．

2．グラムシとマルクスにおける科学とテクノロジー

まず前提として確かめておく必要があるのは，第一に，第一次世界大戦期に書かれたグラムシの新聞諸論説である．この諸論説をかいま見る限りでは，まだグラムシの人間についての概念も，また人間の活動の本性についての概念も，クローチェ【Benedetto Croce 1866-1952】型の観念論による大きな影響のもとにあり，「人間は，とりわけ精神 spirito である．つまり歴史的な創造物であって，自然的なそれではない[2]」，と書いている．しかし，【1929 年以降の】『獄中ノート[3]』のなかでは，このような立場は，根本的にくつがえされている．その第Ⅱ分冊【以下Ⅱ．と略記】，Q10§＜54＞【「哲学研究への序論」】には，次のような文を読むことができる．

「人間性 l'umanità というものは，一人ひとりの個人の在り方の内面を投射するものであるから，さまざまな要素から成り立っている．1」個体 individuo，2」他の人間たち，3」自然 natura……人間は，単に自分自身が自然であるという事実によって，自然との関係に入るのではなくて，能動的に，労働と技術との媒介 mezzo によって，そうなるのである」（傍点は筆者，A稿のもの）

またⅡ. Q11§＜37＞【「科学と『科学的』イデオロギー」】には，次のように書かれている．

「存在は，思考から切り離されては存在しないし，人間は，自然から切り離されては存在しない」．

この文で，グラムシが科学の仕事の核心に据えていることは，自然や事物そのものの世界ではなくて，人間性である．実際に，次のように続けているとおりである．

「したがって科学にとって関心があるのは，実在的なものの客観性であるよりも，人間であり，この人間が，自分の探求方法……，つまり文化，世界の概念，技術を媒介にして，人間と現実との関係を作りだしていく」．

この立場は，1844 年，若いマルクス【Karl Marx 1818-1883】が『経済学哲学手稿』で取っていた立場とあまり隔たってはいないが，1932 年に初めて出版されたこの著作は，グラムシの知るところとはならなかった．(スラッファがその一冊をグラムシに届けるために提出していたが，監獄当局の検閲によって，自分にはそれを読むことが許されないことを，グラムシは知っていた．）マルクスによれば，科学の使命は，通常は，「単に現象的な運動[4]」によって隠されたままになっている「内的な現実の運動」を研究することにあるが，「人間は，自然科学の直接の対象である．なぜならば，人間にとっての直接的な感性的自然はとりもなおさず人間的感性（これは同じことの表現である）…であるからである．…しかし自然は人間にかんする科学【学問】の直接の対象である．人間の第一の対象 —— 人間 —— は自然，感性であるからである．…自然の社会的現実性と人間的な自然科学または人間にかんする自然的な科学【学問】というのは同じことの表現なのである[5]．」二人の思想家にとってはともに，人間性が科学の対象なのである．

しかし，このような立場が，二人の著作家の間にある類似を示している唯一の点であるわけではない．二人ともまた，技術の媒介的な機能を認識している．グラムシにとっては，「科学と現実との間をもっぱら媒介するのは，工業技術 tecnologia である」(Ⅲ. Q15§＜33＞【「哲学研究への序論」】．これは，「思考と現実との間」を媒介する機能の位置に科学をおく『ファシスト的批判 Critica fascista』の筆者たちと論争しているなかでの言葉である．「科学といっても，これもまた思考ではないのか？」と，グラムシは問い返しているが，おそらくこの場合，暗に論争の相手とされているのは，クローチェである．クローチェは，科学を —— 後に見るように —— 自分の「純粋概念」の「真の認識」とは何か異なったものとして考えていたからである．）他方ではマルクスは，工業技術と同義のものと解されることになる言葉，つまり「産業 industria」(その下で，「人間の本質的諸力は，感性的な，余所ものの，有益な対象という形式，疎外の形式のもとでの対象化されたもの」となる）を用いながら，産業を「人間に対する自然の，したがってまた自然科学の現実的，歴史的な関係[6]」として考察している．別の所では，「工業技術は，自然に対する人間の能動的な態度[7]」をあらわに示すものである，と述べている．この数行後でマルクスは，自然科学に基づいてモデル化され，「歴史的な過程を排除しているような，抽象的な唯物論の諸々の欠点」を批判している．また自然科学にかんするこのような見地は，グラムシのうちにも一定の反響を見出すが，それは彼においてだけのことではない．たとえば，ファイアラー

ベント【Paul Karl Feyerabend 1924-94】は，他ならぬマルクスの上記の個所の参照を求めながら，「誰にとっても読むことのできる仕事の方が，“ 客観的 ” な外見を呈していて，人間の願望や行動が通用しそうにない他の仕事よりも，いっそう好ましい[8]」という言い方をしている．

3．実証主義に対する批判：グラムシとフランクフルト学派

実証主義が，普遍的な方法を形成する試みとして（まさしく自然諸科学にモデルをおいている），他の —— 自然諸科学以外の社会科学や経済学などの —— 諸科学への適用を目ざしたものとして，とりわけグラムシによって批判の対象とされているのは，ブハーリンにかんするノートのなかでのことである．注目すべきことは，実証主義に対するグラムシの持続的な批判には，30 年代の初め，フランクフルト学派によって表面に押し出されてきた批判（そんなに多いものではないが）に似ているところがあることである．違うところはと言えば，この学派の傾向を代表する人々のうちには，科学や工業技術それ自体ほどには，科学や工業技術の実践を批判の標的に含めることをしなかった，という事実を挙げることができる．マルクーゼ【Herbert Marcuse1898-1979】は，科学や工業技術を次のように考えた．「工業技術の応用だけではなく，工業技術そのものが支配なのである」から，新しい科学が必要になっている．この新しい科学は，その合理的な性格を失うことなく，「自然についての現存の諸概念とは本質的に異なった諸概念に到達する[9]」のである．マルクーゼによって用いられている「科学」および「工業技術」という用語は，いつでも首尾一貫しているようには見えないが，ともあれ彼が言いたいことは，たとえば，出発点として，利潤の最大化の代わりに，技術革新の計画性によってもたらされるかも知れない諸々の効果をもってきていることから考えると，単純に，科学を人間化する必要があるというだけのことらしい．けれども，彼がミッシローリ【Mario Missiroli 1886-1974】の態度にあまりにも近づきすぎているのではないか，という曖昧さが残っている．ミッシローリにとっては，「科学は本質的にブルジョア的な概念であり…ブルジョアジーが自分を守ったり，批判したりする際に用いる甲冑」なのであった．このような視点は，『オルディネ・ヌウォーヴォ』に載せた論文の脚注の一つで，トリアッティ【Palmiro Togliatti 1893-1964】からの批判を招くことになったし，またグラムシからも，Ⅱ. Q11 § 38【「科学と『科学的』イデオロギー」】で —— ソレル【Georges Sorel 1847-1922】の似たような意見とともに —— 批判の対象に取り上げられることになった．グラムシによれば，科学の客観的な核心（このことについては後述）とは，まさしく或る階級が，他のグループの科学を，そのイデオロギーを受け入れることなしに，自分のものにできるもののことである．

ところで，ハバーマス【Jurgen Habermas 1929-】の『“ イデオロギー ” としての技術と科学／学問』という小論集がある．それは，一つには，科学の客観性の見地を，もう一つには，マルクーゼのその問題にかんする見地を組み合わせたものとなっているが，とりわけここでの批判の標的になっているのは，科学の諸々の結論がほとんど宗教まがいのものとして独断的に流布されていることである（「今日支配的な，背景であざやかな光をはなっている lustro splendente

イデオロギーは…科学を物神化しつつある」)．このような態度は，社会制度の発展が技術的 ― 科学的な進歩の論理によって決定されるかのような展望【「技術至上主義の意識によって正統化される住民大衆の脱政治化」】に道をひらくことになる[10]．ここでは，「技術的 ― 科学的な進歩」が批判されているのであるが，その場合に，批判されているのは，「科学的 ― 技術的な進歩」によって獲得されたいくつかの成果を【社会関係に】一面的に適用することを無批判的に受容させる形式であって，科学そのものの論理的な過程ではない．もしもこのような読み取り方が正しいとするなら，ここに見られるフランクフルト学派の見地は，またグラムシやトリアッティなど「オルディネ・ヌウォーヴォ」派によっても共有されていたものであった．

4．イタリアにおける科学への批判：宗教と観念論

公式のカトリック教は，イタリアにおけるヘゲモニー文化の潮流の一つをなしており，そもそもの最初から，近代科学に対しては（ごく好意的に見ても）無関心であった（【『法王の歴史』の中でL. パストール【Ludwig von Pastor 1854-1928】は次のように書いている．「カトリックの国々においては，(コペルニクスの）新しい地球システム論を擁護する著述の全面的な禁止が天文学に対する愛好熱を弱めたと言える．」…ガリレオの断罪で頂点に達した教会側の反応によって，イタリアにおけるルネサンスは，知識人たちの間においてすらも終息するのである】Ⅲ，Q 17§＜15＞「ヒューマニズムとイタリア・ルネサンス」．またⅡ. Q6§＜151＞「カトリック的な活動」および§＜152＞「イタリアの知識人の歴史」等々）．

ナポリの観念論は，それとは異なった観点から，この科学不信を強める役割を果した．実際，ヴィーコ【Giambattista Vico 1668-1744】が言うように，科学というものは ―― 真理の探究，もしくは普遍的かつ永遠な諸原理の探求として ―― 知が「因果関係の道を経由する」ところに存立しなければならないはずであるが，にもかかわらず我々は，ヴィーコによれば，自分たち自身がおよそ作り出すようなものを知ることができるにすぎないからである．数学の扱う対象の類は虚構されたものだし，物理学の諸々の実験は自然の統体をそのうちに組み入れることができないという契機から考えても，自然の歴史も，自然科学・精密科学も ―― その定義によって ―― 完全な「科学／学問」，すなわち真の科学／学を構成することはできない．ただいくつかの社会科学だけが，第一には歴史科学のみが，現実的かつ完全な科学／学問となることができる．それと言うのも，このような科学が扱うのは，人間の諸々の制度，つまり「疑いもなく人間たちによって作られたところの，諸国民のこの世界」であり，したがってその世界がまとっている外見は…その内部に，人間の同じ精神の諸々の変容を…発見しなおすためのものなのである[11]」．

この系譜をはっきりと引き継いでいるのが，クローチェである．彼にとっては，歴史は，それ以前の諸々の卓越性 preeminenze を維持し続けるものである．「具体的な歴史に到達するには，個別的な事実の感知 percezione，もしくは歴史的な認識を介さなければならない」とは，クローチェの歴史的なアプローチについて，オルシーニが書いている[12]ところである．クローチェは，

『論理学』のなかで，次のような論議をおこなっている．「存在を人間の精神の外部にあるものとして，また認識を認識の対象から分離可能なものとして考想 concepire することは，あたかも対象が，認識されることなしに存在できるようなものとすることであり，そのように考想することが，対象の現存在 l'esistenza とは，或る立場の設定 una posizione，言い換えれば精神以前に何か“場所 posto”のようなもの，精神にたいして“所与”であるようなもの，精神とは異なったものがあるとすることであるのは，明白である．」しかし彼の全哲学が「証拠立てているのは，精神の外部には，何もないということであり，したがって精神を前にして，そういった種類のもろもろの“立場の設定”といったことはありえないということでもある．つまり，力学的な世界であれ，自然的な世界であれ，外部の世界についての諸々の考想そのものは，すでに，外部のものによって位置づけられるのではなくて，精神そのものが位置づけるのである．精神が，この“外部”と称されるものを形成するのは，外部を享受するためであるが，ただし精神がもはやそれを享受しなくなるやいなや，それをふたたび無に帰してしまうことになる．[13]」このような問題の立て方をする限り，彼にとっての科学的な実践とは，世界を多かれ少なかれ恣意的な仕方で分割するということだ，ということになってくる．その世界たるや，数学の確実性は失われたとすることから帰結する立場を，最も極端に押し詰めた立場で設定したものであって，ポアンカレ【Jules-Henri Poincare 1854-1912】がその立場にゴー・サインを出し，クローチェがそれに乗って自分自身の見解の支えとしたのである（『論理学』，p. 359-60）．このイタリアの哲学者にとっては，ある時点では，或る概念（疑似概念 pseudoconcetto）は有用なこともあるが，他面，その次の時点では，この概念は，無用なお荷物として捨て去られることにもなる．こうして歯止めのかからない相対主義の立場に至り着くことになる．

クローチェによれば，自然とは，「精神そのものの契機でもあれば，産物でもある．[14]」そして自然諸科学とは，「経験的な概念（真の認識ではない概念）の合成である」（『論理学』，p. 231），もしくは，オルシーニが見るところでは，「実践の便宜のために論理的に発展させられたフィクションである[15]」．その際にオルシーニが踏まえているのは，「日々に明らかになっていくように，自然は，その概念からして，人間の実践の産物である[16]」というクローチェのもう一つ別の主張である．自然が「精神の「設定したもの posizione」（或る要請されたもの un postulato，或る所与のもの un dato）であると言われているからといって，この論点にかんしては，とくに驚くべきものであるとするには当たらない．クローチェは，その論点をアヴェナリウス【Richard Avenarius 1843-96】，マッハ【Ernst Waldfried Joseph Wenzel Mach 1838-1916】，ポアンカレの約束主義／便宜主義 convenzionalismo の上に設定していたのであるからである．クローチェ風に言い換えれば，「数学，物理学，自然諸科学の実践的で経済的な性格」の上に設定していた（『論理学』，p. 356）のであって，そこで用いられている「経済的」という言葉は，「有用である utile」というクローチェ哲学のカテゴリーと一致しているものと理解されなければならなかった．マッハにとっては，「物体もしくは事物というのは，感覚の諸々の集合を知的に短縮したシンボルである．と言うことは，我々の知性の外部に現存在をもっていない，と言うことである．

商人たちが商品を入れた紙箱の上に貼り付ける商標のようなもので，その紙箱のなかに，仮に何か値打ちのある商品が入っていないかぎりは，どんな価値もないのである（『論理学』，p. 357）．ベルクソン【Henri-Louis Bergson 1859-1941】も同じ意見であり，彼が「考えていることとマッハのそれとのあいだには違いはなく，自然科学の概念は，シンボルであり，商標なのである」と言うのが，クローチェのはっきりした賛成意見である（『論理学』，p. 358）．

それに引き替えてグラムシは，自然界の諸現象を叙述するために用いられる言葉遣いに対しては，大変な注意を払っている（Ⅱ. Q11§＜36＞「科学と『科学的』イデオロギー」――この点は後述――およびQ11§＜16＞「専門用語集とその内容とにかかわる諸問題」）．彼にとっては，名称というのは現実に対する言語的な記号（このような用語を使っているわけではないが）であり，その記号の背後には現実が控えているのであった．「諸科学の大きな発展」は，「物質の研究」でもって確証される（Q5§＜29＞）のであって，「我々の知性の外部に現存したことのない感覚の集合」その他でもって，確証されるわけではないのである．

いったん自然が精神の契機とか構築物とかへと引き下げられてしまったなら，残されていることすべては，「諸々の事実／出来事を単純に分類する課題だけ」になる．「議論になっているのが，いったい動物学であるのか，植物学であるのか，鉱物学であるのか，はたまた特殊な諸化学を網羅した化学であるのか，または物理的な諸現象や諸力の階層を網羅した物理学であるのかと言ったことは，関係がない．これらの科学のうちのいずれかが普遍性をもつとされるのは，恣意的なことなのである…」（『論理学』，p. 214）．こうしてクローチェの観念論の立場は，実証主義のそれと似たものに至り着く．実際にグラムシは，「哲学的な経験と科学的な経験」（Ⅱ. Q11§＜45＞）のなかで，実証主義には「抽象的な分類」への傾向があることを挙げて，実証主義を正確に批判しているが，こうしたタイプの立場は，「経験主義に対する非難」（Q17§＜23＞）のなかで，改めてグラムシによる批判の対象となる．グラムシの見解では，単なる分類では，一連の事実を研究して，それらの間にある諸々の関係を発見するためには，不十分だからである．単なる分類は，一つの“概念”を前提とし，この“概念”によって，この一連の諸事実を他に可能な一連の諸事実から区別することに同意をかちとるのである．こうして，「第一回目には事実を，第二回目には法則を」というようにして，同じ事実のただの繰り返しから或る「法則」を「導き出す」のは，【同一律に反した】不当な推論 illegale であり，これこそ「同じ事実を二重の意味に用いた fatto doppio 詭弁でこそあれ，およそ法則といったものではありえない．」別の言い方をすると，（【個別専門】科学の通常の境界の外へ出て行くという意味での）超 ― 科学的な meta-scientifico 種類の概念が必要となるのは，とりわけ，現実主義的な現代の科学哲学者たちの同意を取り付けることで，落としどころのある理論とか立場とかを構築するためである．このような現代の科学哲学者たちにとっては，「規範的な科学／学問 scienza normale」の発展のなかで諸々の規則の働きを支配することになるいくつかの超 ― 規則がそこに存在している」というわけである．

クローチェは，『論理学』のなかで，「自然諸科学の経験的もしくは実践的な性格」（p. 213）

を強調している．このような性格は，「論議に使うには術語については穴だらけだし，叙述の様式については不透明[17]」であることからしても，自然諸科学の概念的な諸機能[18]は，自然を ―― 観念論の哲学についてのグラムシ的な解釈によれば ―― 「約束主義的／便宜主義的な抽象物 una astrazione convenzionale」たらしめるところにある，ということを示唆しているように思える（I. Q9 § 59「百科全書的な諸観念．経験主義」）．ここで，「約束主義的／便宜主義的な」という言葉が用いられているのは，ラベルないしは商標を指していて，強い意味においてのことであるように思える（上に見たマッハやベルクソンにかんするコメントを参照）．「クローチェによると，自然諸科学は，フィクション，もしくは抽象的なことを問題にする[19]」のだから，「疑似 ― 科学」である．こんな「疑似 ― 科学」という用語が使われたからと言って，侮蔑的な意味をもたせられているわけではないが，それでもクローチェにとっては，自然諸科学は，真の科学／学問，哲学よりは何ほどかは劣っていることを表現するものであった．実際にも，「自然諸科学とは，擬似的な諸概念による構築物以外のものではない．つまりそれを成り立たせているのは，本来は，経験的なものとか，表象されたものとかと名づけられてきた疑似諸概念の形式である．自然諸科学は，「諸々の現象についての科学（諸々の本体 noumeni についての，恐らくは哲学であるような科学／学に対置させられている科学），もしくは諸々の事実についての科学（やはりまた哲学，価値の科学／学に対置させられている科学）なのである」（『論理学』，p. 212）．換言すれば，哲学は（それが「具体的なもの」のうちにあり，「哲学的な論理学」として使用されている場合には），「真の普遍性」を問題にしており ―― したがって真の科学／学問であるが ―― それに引き替えて，自然諸科学（「分類」の論理を使用する「経験的ならびに抽象的な自然諸科学」）は，「誤った普遍性」，「一般性とか抽象性とか」を問題にするのである（『論理学』，p. 210 及び p. 211）．

こうしたこと凡てに含意されていることは，クローチェの諸々の苦心の作業が，科学的な活動の認識論的な価値を体系的に過小評価することにあった，ということである．その点については，マッシモ・アロージが，科学／学問へのグラムシのアプローチを再現しようとする最初の試みのなかで，気づいたこと[20]であったし，また実際にもグラムシがクローチェとジェンティーレ【Giovanni Gentile 1875-1944】とを批判したのは，文化の世界から，自然諸科学や精密諸科学を切り離してしまったためであった（III. Q14 § ＜38＞「イタリア文化についての覚書」）．しかしクローチェとジェンティーレとに対する批判でもっと重要であったのは，グラムシのその動機づけであるが，彼によってそのすべてが明言されているわけではない．理由の一つは，先に引用したピエーロ・スラッファの手紙のうちに，言外に示されている．科学者たちの多くは，哲学には弱いのだから，クローチェの議論が，自分たちの科学的な諸成果を信用できないものでもあるかのように思わせてしまっている，という事情である．そうかと言って，科学者が手に入れた科学的な成果が，この哲学的な弱さのために，直接的もしくは間接的な力による否定的な仕方での影響を受けるようになっている，とまで言われているわけではない．クローチェ主義者であろうとなかろうと，哲学的には不適切な，もしくは誤っているような前提に基づいているように見え

るのに，「正しい」結論を引き出すといったことは，誰にとってもありうることだからである．ひょっとすると，クローチェの【自然科学への】批判もまた，観念論哲学者たちが，科学で扱われる材料において依然として無知が際立っているのを —— 意識的なものであるのか，そうでないのかは重要なことではないが —— 隠そうとする試みとして，理解した方がいいのかも知れない．実際に，『論理学』，つまり主題的にはクローチェが自然諸科学・精密諸科学に最も近づいているこの著作のなかでも，彼は自分の無知さ加減を露呈しているところ，ないしは信じがたいような浅薄な仕方で自然科学を取り扱っているところがある．彼は，次のような問題提起をしても，どんな結果も惹き起こすことはないと思っているのである．「自然についての哲学的な知識さえあれば…自然諸科学には見るべきものは何もない」(『論理学』，p. 220)．

また彼は，「科学の最高諸概念を厳密に定義するあれこれの試みが欠けているわけではない」ということは認めながらも，「こういう場合すべてにおいて，自然科学からは離れることになる」，と主張する（『論理学』，p. 214)．アブルッツオ出身のこの哲学者は，こうした手品を使うことで，科学哲学は，科学から切り離し可能なものとなるだけではなく，まったくの別ものだと言って，頑張るのである（と言うことは，何れかの一方が採用するとか，結論するとかすることが，他方にとっては否応なく「訂正する」といったことにはならない，ということである)．科学者たちの思弁的な説明は，「たしかに，きわめてわずかな妥当性しかもちえない範囲で通用するが，自然研究という点では naturalisticamente どんな役にも立たないので，それだけにますます空虚な博識をひけらかしながら，好き勝手に無味乾燥なものを持ち込んできては，“ 原子の複合体 compresso di atomi ” を動物と呼び，“ エネルギーの形相 forma di energia ” を熱と名づけ，“ 生命力 forza vitale ” を細胞と称しているのである」(『論理学』，pp. 214-5)．「エネルギーの形相」を構成するものについての定義を例にとってみると，クローチェは，別の個所（『論理学』，p. 359）では，エネルギー保存の法則をめぐって相変わらずの困惑ぶりを示しつづけているのだが，それは 1905 年にアインシュタイン【Albert Einstein 1879-1955】によって —— まさしくその点にかかわることなのだが —— 質量とエネルギーとの同等性（$E = m^2$）の解明後，さらに何年も経って後のことであった．この種の無理解が人を十分に驚かせるに足るものであったことは，このアインシュタインによる等値式が，科学の歴史のうちでも（そしてまた，その表式が単純で，理解しやすいことでも）最も有名なもののうちに入っていて，時には，ひどい反対の「検証」にも晒されながら，諸々の重要な新発見に導くことになっていくまさにその時点でのことであったからである．もっと驚くべきことは，諸々の重力作用下での運動の本性にかんして，クローチェによって露呈されている無知であって（同上)，それによってクローチェは，精密諸科学の方法への無頓着さ，および凡庸な権威なるものの見解への依存ぶり（この両方の欠陥のゆえに，グラムシは別の文脈でクローチェを批判することになる）かの何れか，もしくは両方の秘密をみずから洩らすことになってしまった．ここで引き出されるべき結論を言い表わしているものとしては，スラッファの言葉を思い出しておくのがいちばんよいことになるだろう．もしも，一般的に，科学者たちには，「哲学の試験で恥ずかしい落第点をとるのが相当なところである」とするなら，

「自然諸科学についての無知」ということでは，クローチェは最高点がつく事例となる[21]」.

5．グラムシとクローチェ：二つの対立するパラダイム

ところで，或る議論もしくは或るパラダイム（それも，クローチェの場合のように問題になるようなそれ）の不十分な，または誤った本性は，単純にそのいくつかの弱点を攻めることでは明らかにはならない．グラムシは，ブハーリンにかんしてきわめて批判的であったが，本来のその理由は，このロシア人が，非マルクス主義的な諸々の哲学を批判するために，このようなアプローチに身を委ねることでよしとしていたからである（Q11§＜15＞，「『科学／学問』の概念」）．トーマス・クーン【Thomas Samuel Kuhn 1922-96】によってパラダイム paradigma という概念が最初に形成されたことから分かるように，パラダイムとたたかうただ一つの仕方は，もう一つ別のパラダイムをそれに対抗させるという仕方であって，この別のパラダイムは，最初のパラダイムによって知識として獲得されているものすべて（もしくはほとんどすべて）を説明したり，また最初のもののさまざまな限界を乗り越えることができたりするものでなければならない．グラムシは，そのことをそのような言い方で明言したわけではないが，このような類いの課題を（たとえ「パラダイム」というような近代主義的な概念において或る面では欠けているところがあるにしても）彼の心のうちにもってはいたように思える[22]．と言うのは，科学／学問という仕事の本性にかんする彼の多くのコメントは，クローチェとの論争に向けられているし，しばしば彼の言葉遣いを再現したりしているからである．

実践の哲学をグラムシが構築する際には，一見したところ，二人の思想家と共通に思える或る立場がある．グラムシにとっては，「存在は思考から，人類 l'umanita は自然から，活動は物質から，主体／主観は客体／客観から分離することはできない」（Ⅱ. Q11§＜37＞「科学と『科学的』イデオロギー」）と言い，この二項並立的ないろいろの立場設定は，精神 ― 外部世界というクローチェ的な立場設定に似ているように見える．しかし，一つの最も重要な差異がある．クローチェは，自分の対概念の両項をたんに分離しないだけではなく，しばしば彼の観念論的な弁証法においてそうするように，一方の項を他方の項の部分としてしまう．すでに上に見てきたように，外部の世界は，たしかに「精神」の世界から分離されることのできないものとされているだけではなく，後者によって「設定されたもの」とされており，形成されることもできれば，また「それ以上享受しない時には消滅させられることもできる」という意味において，「実践的なもの」でもあるものとされているのである（『論理学』，すでに最初に引用）．

グラムシにとっては，弁証法のこのようなモデルは，19 世紀的な近代主義からクローチェによって変化させられたものであって，自由に統合しあい，かつ衝突しあう二つの項を承認することはない．したがって，このようなモデルは，弁証法を何か欠陥状態にあるものとして表現しているのである（たとえば，【「クローチェの歴史記述は堕落し，毀損されたヘーゲル主義である」】Ⅱ. Q10-Ⅰ§＜6＞；「」Q10-Ⅱ§＜41x＞及び§＜41xvi＞）．ヘーゲル【Georg Wilhelm

Friedrich Hegel 1770-1831】やマルクスの古典的な図式にしたがえば，対立しあうものの弁証法 dialettica degli opposti であったものを，「異なったものの弁証法 dialettica dei distinti」でもって置き換えたけれども，クローチェは，その置き換えたものが「弁証法であるのか，それとも正確にはどんなものであるのか，証明することに成功していない」（Ⅱ. Q10（parteⅡ）§＜1＞「ベネデット・クローチェの哲学」）[23]．それとは反対に，グラムシにとっては，どんな一対の概念の二つの項も，差異のあるもの（差異の弁証法というクローチェ的な意味においてではないことはもちろんである）でありながら，両項の間での相互関係において，弁証法的な一体性の二つの極を形成するのである．

自然における特殊な場合には，たがいに異なった概念（グラムシ的な意味でも，クローチェ的なそれでも）は，かならずしも弁証法によって想定されている二つの形式をまとって出現するわけではないけれども，弁証法の二概念化の構想 due concezioni が，弁証法の異なった二つの概念への移行を助けることは確実である．クローチェの概念においては，弁証法は思考の（従属的な）構築物となるが，それは，おそらく，次のようなことを意味するであろう．すなわち，「人間の概念の外部，人間の精神 spirito の外」に見出されるものすべては，「それがありうるにしても，無意味な混沌ばかりがあるのであって…それに対して，精神 mente はまだ形をあたえたことはなかった.[24]」換言すれば，「精神的なもの mentale ではないような何らかの現実が存在しないわけでもなければ，存在できないわけでない[25]」と言うのである．他方でグラムシは，「人間の精神の出現以前に自然が現存したことを否定しているのではなくて」，人類 l'umanità 抜きに，と言うことは人類以前に自然が「従属的であった pertinenzà とか叡知てきであった intelligibilita とかということだけを否定しているのである[26].」

クローチェとは反対の誤りを犯したのが，実証主義者たちであった．彼らは，先に示しておいたような【精神と存在，認識と認識対象との】分離の型に従って，「宗教の多くの形式の一つのうちに，もしくはナンセンスな抽象化のうちに」陥っていく」（Ⅱ. Q11§＜37＞「科学と『科学的』イデオロギー」）．彼らにとっては，「人間の精神と神とのカトリック的な二元論」（神によって外的な世界が創造されたという現実主義に余地を与えるような二元論）は，人間の精神と自然との二元論へと転化されていく[27].

6．グラムシ：科学の現実主義的な哲学者

グラムシの現実主義は，素朴 ― 民衆的なタイプのキリスト教の現実主義とは，大きく異なったものであった．彼は，イタリアでガリレオ【Galileo Galilei 1564-1642】によって開始された大きな思潮に結びついていたのである．ガリレオは，『獄中ノート』のなかで，哲学的 ― 科学的な旧時代と近代との分水嶺という文脈のなかで，しばしば引用されている（Ⅱ. Q6§＜151＞，§＜152＞；Q10-Ⅰ§＜41i＞；Ⅲ. Q17§＜15＞）．ガリレオは，彼は彼でまた，科学的なアプローチの主潮のうちに根を下ろして，さらにいっそうひろい繋がりをもっていた．実際に，ソクラテ

ス【Sōkratēs 前 469 頃-399】が言っていたとおりである．「事物を学び，研究するためには，事物そのものからはじめるべきであって，名前からであってはならない」，と．そしてガリレオ自身は，次のように述べている．「名前や属性といったものは，事物の本質／存在に適応させられなければならないのであって，本質／存在が名前にそうさせられるべきではない[28]．」こうした考想は，クローチェのそれとは正反対であるが，グラムシのそれとは似ている．グラムシにとっては，その現実主義を支持できるものとし，正当化してくれる力は，エンゲルス（『反デューリング論』第 4 章）の主張であって，『獄中ノート』（Ⅱ. Q11 § ＜17＞「いわゆる『外部の世界の現実性』」）にも引用されている．「世界の現実の一体性 Einheit／unita は，それの物質性にある…この物質性は…哲学と自然科学との長くて，遅々とした発展によって証明されている．」もろもろの対象（つまり外的な世界）は，結局，現実的なものなのである．一例を挙げると，一つの科学的／学問的な理論が，何らかの対象の現存を仮定するということには，理由があるとも，ないとも言える．その【現存を仮定した】対象（たとえば電子）の概念は，他の分野の全体を構成する部分であることになるが，その他の分野は，最初の仮定のなかに生まれていた概念にはかならずしも直接にむすびついているわけではないから，この【他の分野である】実体 entita は，客観的な現実をもっていると，主張できるのである．この主張は，グラムシの論考 discorso と両立できるのではないかと，私には思えるし，また多分，ここで上記引用してきた主張と，「すべての人間によって確証されてきた」（Q11 § ＜37＞）限りのことのいっさいにかんする客観的な現実性の陳述との間にある絆を明確にしてくれることであろう．

現実主義というのは，世界についての一つの前提的理論 ipotesi，概念，つまりはイデオロギーであるということを，グラムシとともに，繰り返しておこう．

> 「科学を生活の基礎におき，科学によって優れた世界観を作りあげるということ．科学は，われわれの眼からあらゆるイデオロギー的な幻想の霧を吹き晴らしてくれるし，人間をあるがままの現実の前にたたせてくれるということ．このことは，実践の哲学には，自分自身の外部に，もろもろの哲学的な支えが必要である，という考え方に連れ戻してくれる．ところが実のところ，科学もまた，一つの上部構造，一つのイデオロギーなのである」（Ⅱ. Q11 § ＜38＞「科学と『科学』イデオロギー」）．

グラムシは，このパラグラフにすぐ続けて，「上部構造の研究においては，科学は，その構造に対する上部構造の反作用が特殊な性格をもっているという事実に対して，何か特権的な立場を占めている」（Q11 § ＜38＞）のかどうか，自問している．そのような特殊性が 18 世紀に遡るものであることは，彼がここで言っているように（あるいは別の所ではガリレオが言っていることでもあるが[29]），エンゲルスによって例示されている諸々の事実とか，科学の方法論に生来のものである抽象のより一般的な過程とかのお陰をこうむったものである．だからこの過程は，一方の客観的な事実と，他方のその事実を超越していく体系，つまりグラムシによってイデオロギー的な特殊な光暈 alone の一つと見なされた体系とを区別することを許容する．このような過程そのものが確証しているように，とりわけ自然・精密諸科学のいろいろな成果は，それらが達成され

た時期とか社会とかからは自立した客観的な性質／自然 natura をもっている．したがって，或る社会階級（グラムシにとってはプロレタリアート）は，社会の先行する諸段階で仕上げられた諸結論を独自にまとめることができるのであって，その立場は，ミハイル・バフティン【Mikail M. Bakhtin 1895-1975】の協力者V. N. ヴォロシーノフ【Valintin Nikolaevic Volosinov 1905-1960】が，1920 年代に，イデオロギーの本性の記号論的な分析をおこなった立場に似たところがある[30]．この議論は，たんにミッシローリに対して回答を与えたというだけのものではなくて，(グラムシによれば）マルクス主義に先行するすべての哲学を，「一つの精神錯乱であり，狂気である」と判断したブハーリンに対する回答でもあった（Q11§＜18＞）．またこの回答は，ずっと後になって，科学の客観性に敵対的な立場をとることになったと思える他の（マルクーゼのような）理論家たちにも関連することになる．

グラムシの立場は，真理の重要な核心を含んでいるが，グラムシが十分に同意しているとは見受けられない他の諸々の問いを考察しないままに残している．科学の現実学派は，1962 年にトマス・クーン『科学革命の構造』の初版が出版されて以降，事実と前提的理論との間には，グラムシが考えていたと思えるほどきっぱりした区別は存在しない，ということを明らかにしてきている．実際，事実が示しているように，科学的な諸事実そのものは，「理論負荷的 theory-laden」，すなわち理論によってあらかじめ負荷がかけられているのである．別の言い方をすれば，「観察の言語」の体系，つまり「科学的に，ないしは経験的に，中立的である概念」の体系といったものはあり得ない，と言うことである．すでに今では古典的なものになってしまったが，「質量」とか「アトム」とかいった概念がある．前者は，物理学的な或る大きさであり，後者は観察可能な或る物理学的な実体 entita（したがってグラムシ的な用語のなかで —— 想定されている —— “ 客観的な事実 ”）であるが，ともに概念としては，大きく異なったものとなっている．概念の含意について見ると，最初の場合の「質量」と言っても，ニュートン【Sir Isaac Newton 1642-1727】の体系におけるものか，アインシュタインの体系におけるものかということがあり，次の場合の「原子」と言っても，J. ドールトン【John Dalton 1766-1844】以前なのか以後なのかということがある．ドールトンの原子論以後には，「データそのものが変化してしまっている[31]」のだから，グラムシの定式では，その時代からすれば当然のことではあるが，ドールトンの理論について考慮できていないこととなるように思える[32]．そしてまた，この場合に，測定されているものは「客観的な事実」に対応しており，他方でそれの解釈はイデオロギー的な側面であると言うにしても，それで彼の立場が救われるわけにはゆかない．事実と前提的な理論との間をつなぐ絆は，彼が通常のこととして考慮に入れていたよりは，はるかに緊密であったのである．

しかし，事実と前提的理論との間の区別が，最近の考察に照らして不適切であるように見えるにしても，この区別は，グラムシの論議の主軸として見直されてよいし，恐らくは，大切に定式化しなおすに価するものである．もっと前向きに，かつもっと入念に問題にアプローチするためにはどのような手順を踏んだらいいのかにかんする予兆となるようなことや，いくらかの前触れになるようなことが，ⅡQ10-2§＜31i＞に示唆されている．そこでグラムシは，もういちど論争

の相手に選んでいるのがクローチェであり，そのクローチェは，マルクスの「フォイエルバッハ・テーゼ」について，その本来の性質を哲学的なものではないという前提を立てていることに見るように，強い当惑を表明していたからである．このアブルッツォ出身の哲学者によると，マルクスは，「ヘーゲル哲学を転倒させたと言っても，哲学一般，あらゆる種類の哲学をそうしたわけではなかった．そして哲学することを実践的な活動でもって取り代えたのであった[33].」

サルデーニア出身の哲学者によれば，クローチェは，当惑するだけではなく，意表を突かれた状態にさせられたのである．その理由は，実践の哲学が「哲学者たちの下で」研究したのは，「もともと（!），哲学的なことなんかではなかったからであった．哲学者たちが代表していたのは，実践的な諸々の傾向であり，社会的，階級的な諸々の感情であった[34]」，というのである．当然なことだが，グラムシは実践の哲学のこうした関心を擁護して，「哲学者たちと，彼らが動かされてきた歴史的現実との間をつなぐ歴史的な結びつきを探求する」必要がある，と言う．そして，皮肉の利いた文章で，自問している．「クローチェの言うのとは逆に，“ 哲学 ” とは，もともとは，分析によって哲学者の仕事のうちに “ 社会的なもの ” を同化することであって，この分析の “ 残り滓となっている ” ものをそうするようなことではないのではないのか？」，と．

こうした歩みのなかで我々は，我々の時代にきわめて近しい論議の残響を聞くことになる．実際に新しいパラダイムが主張される折にしばしば重要だと思われるのが，そのパラダイムを提起する科学者の教養形成とアプローチの仕方である（この教養形成やアプローチは，しばしば時代の哲学の流行思潮を反映する）．こうしたことが感じられるのは，或る理論が形成される特殊な仕方においてであり，またこの過程を経て観察されている「諸々の事実」そのものの本性のうちにおいてである．セーレン・キェルケゴール【Soren Aabye Kierkegaard 1813-1855】（そして彼のお気に入りのハラルド・ホッフディング【Harald Hoffding 1843-1931】）がニールス・ボーア【Niels Henrik David Bohr 1885-1962】にとって —— したがってまたいわゆるゲッティンゲン — コペンハーゲン学派の仕事における量子力学の支配的な解釈にとって —— もっている重要性は，現代にとっては古典的な例と言える地位にまで達しているように見受けられる[35].

7．神秘主義に反対して

翻って考えてみると，グラムシは，科学という言葉をはっきり使用することを目的にしたノートを作っている．そのうちの短い第Ⅲ章【「科学と “ 科学的 ” イデオロギー」】の最初のパラグラフ（Q11-Ⅲ§＜36＞）で，挑戦的な言葉を発して後，いくつかの発想 nozioni を書きつけていく．新しい物理学の分野に押し入って，場合によっては，超 — 観念論的なこと ultra-idealiste はもちろん，反 — 現実的なことまでも展開しようというのである．そこでグラムシによって取り上げられているいろいろの立場のうちで，典型的なものが A. エディングトン【Sir Arthur Stanley Eddington 1882-1944】のそれであった．彼は，数年後には，マルクス主義的な物理学者ポール・ランジュヴァン【Paul Langevin 1872-1946】の後継者として著名になる．「観念論的

な哲学者たちや，彼らの思想を共有する物理学者たち，つまりエディングトン，ジーンズ【Sir James Hopwood Jeans 1877-1946】，ヨルダン【Pascual Jordan 1902-1980】，ディラック【Paul Adrien Maurice Dirac 1902-84】その他の人々によって新しく主張されるようになったことがある．すなわち，物理学における最近の発展【量子力学】が，思考から独立した世界なるものは存在しないということを証明している，と言うのである．[36]」

グラムシ自身は，G. A. ボルゲーゼ【Giuseppe Antonio Borgese 1882-1952】によってその当時展開されたエディングトンの別の考え方についてのコメントのなかで，皮肉な問いを提出している．「顕微鏡で見た物質は，もはや現実的に客観的な物質ではなくて，人間精神の創造物であって，それは客観的に，ないしは経験的に存在しているのではなくなるのであろうか？」，また「無限に小さい諸現象は，それを観察している主観／主体から独立しているものとして考えることはできなくなるのだろうか？」，と．グラムシには知られていないことであったが，さらに極端な非合理主義に傾斜し，科学のなかに宗教をもういちど導入しようとするもう一つ別の発想があった．実は 1920 年代のこと，E. ウイグナー【Eugene Wigner 1902-1995】が，波動から神の現存を導き出そうとしたのである．波動は原子以下のレヴェルでの粒子運動を示すと言うのだが，スラッファは，すでに上に引用したグラムシ宛の手紙に，「このような主題のもとで，少なくともイギリスにおいては，何人かの科学者たちが実証主義を棄てて，ある種のお粗末な神秘主義に向かって歩き出しています[37]」，と書いていた．ここで批判されているタイプの諸々の立場は，すでに過ぎた時代の遺物であって，もはやどんな影響ももたないもののように思えるかも知れない．にもかかわらず，この種のものは，相変わらずその出番をうかがっている感じである．最近も，ノーベル賞受賞者【1984 年度，物理学】のカルロ・ルッビア【Carlo Rubbia 1934-】が，宇宙を支配する秩序から神の存在を導きだそうとしているようである[38]．ところが 1992 年の初めの頃，「ビッグ・バン」直後の宇宙の残存痕跡【いわゆる黒体輻射】が（宇宙そのものの起源と進化を我々が知ることのできるもろもろの重要な諸発見によって）一般に知られるようになったから，その素材に付着していたなにがしかの（文字通りに，推論の上でわずかに絶対的な最小限度と見積もられという意味において）神秘的でもあればまた非合理的でもあることを特徴とした彼の推論は，水の泡となってしまった．ここでも再び，グラムシの警告が当てはまることになった．「科学的な精神構造 mentalita scientifica というものは，庶民的な文化の諸現象がそうであるように，脆弱なものであるが，また科学者たちの層においても，脆弱なものである．科学者たちは，技術集団の科学的な精神構造をもっている，と言うことは，自分たちの個別特殊的な科学のなかでの抽象化活動を理解している…が，その活動を“精神的な形態”として理解しているわけではない」（Ⅲ. Q17 § <52>「文化についての諸論議」）．

グラムシによれば，現存するものにかんするパラドックス —— 正真正銘のそれ —— で，原子以下のレヴェルでの諸現象の観察の可能性ほど，古代の諸々の偉大な詭弁／難論（ゼノン等々）を思い出させるものはない．かの偉大な詭弁／難論は，「思考の諸々の道具を洗練するのに役立った」のであった（Ⅱ. Q11-Ⅲ § <36>「科学と『科学的』イデオロギー」の終わりの部分）．グラ

ムシがこの言葉を記した時からずいぶん後になって，広い教養をもった物理学者のルドルフ・パイアールズ【Sir Rudolf Ernst Peierls 1907-1995】は，我々が日常的に慣れている諸対象の脈絡における「現存」と，原子以下のレヴェルでのこの用語の意味との間には，区別があるという立場を選んだ．それは，知らないままに，グラムシの足跡を辿り直すことになった．パイアールズは次のように言う．

「観察者の誰も，何らかの体系についての知識をもっていないなら，この体系の量子力学的な記述は存在しない．なぜならば，この量子力学的な記述は，観察者の機能のうちに入っているからである．」

したがって或る意味においては，一つの現象は，ただそれを観測する行為のうちにだけ，存在するのである[39]．グラムシにとっては，原子のレヴェル以下の諸現象（「微視的なもの」というのが彼の口癖だった）にかかわるいくつかの困難は，用いられている言語と素人の「文章無能力」とに起因するけれども，それがまた，「それまでの微視的な諸現象だけを叙述したり，表現したりするためにだけ，教育を受けて準備をしてきた科学者たちのことでもあるのである．…共通言語の不十分さ，このことがまた微視的なものの諸現象のための言語についても当てはまる．」そして「微視的なものの多くの経験が間接的な，連続した経験であるという事実，その事実の結果が“判明する”のは，結果においてであって，活動においてではない」（Ⅱ．Q11§＜36＞）．グラムシがこうしたいくつかのコメントを書いた時と現在との間には，長い年月が経過したけれども，そこで用いられた言語は，ますます根本的な役割を帯びるようになってきている．トラルド・ディ・フランチア【Giuliano Toraldo di Francia 1916-】が述べている通りである．「微視的な諸々の対象ということにかんしては…近似的に接近する方法の場合には，同じ言語を保存することができる」が，「一つの原子の内部に」到達する時には，「物質的な一つの粒子の定義は，たとえ巨視的な場合から外挿的におこなうにしても，きわめて抽象的で，数学的なものとならざるをえないのである．[40]」

我々は，科学的な認識論にかんして，グラムシによって提供された諸々の解決とか，示唆とかに，同意することもできれば，同意しないこともできる．そのいずれにしても，強調するに価すると思われることは，それらのことを分析してみれば，彼によって擁護された立場が実証主義者たちの認識論的な主張や彼の時代の観念論者たちの無知に対立しているというだけではなく，また現代のクーン派（というよりも多分にポスト・クーン派）の現実主義に接近していることが分かるはずである．彼の多くの省察は，ここで見てきたような科学の諸理論と対決させられることで，現代的なものの響きを伝えており，管見の限りでは，現代的な諸潮流と両立可能であるように思われるのである．

註

1　ピエーロ・スラッファの 1931 年 8 月 23 日付手紙．現在は，ヴァレンティーノ・ジェッラターナ編『タチアーナ宛のグラムシへの書簡 *Lettere a Tania per Gramsci*』, Roma, 1991, p. 23-24.

2　グラムシ『青年期著作集 *Scritti geovanili*　1914-1918』, Torino, 1958, p. 24.

3　ヴァレンティーノ・ジェッラターナ編『獄中ノート *Quaderni del Carcere*』, Torino, 1975, Einaudi.【『獄中ノート』は 4 分冊あり，QⅡはそれが第 2 分冊であることを示す．以下，たとえば Q10-I §＜54＞とあれば，第 10 ノート，第 I 章，パラグラフ番号が＜54＞であることを示し，また原書の小見出しを随時「　」で訳出しておいた.】

4　K. マルクス『資本論』第 3 巻第 18 章，『マルクス＝エンゲルス全集』第 25 巻，大月書店，391 ページ.

5　K. マルクス『経済学・哲学手稿』第三手稿，同上全集第 40 巻，465 ページ.

6　同上，464 ページ.

7　『資本論』，第 1 巻第 1 部第 13 章「機械と大工業」，註八九，原 487 ページ.

8　P. K. ファイアラーベント『批判と知識の成長 *Criticism and the Growth of Knowledge*』, a cura di I. Lakatos e A. Musgrave, London, 1970, p. 228.

9　ハーバート・マルクーゼ（生松／三沢訳）『一次元的人間』河出書房新社，1974 年，166 ページ，186-7 ページ.

10　ユルゲン・ハバーマス（長谷川／北原訳）『“イデオロギー”としての技術と科学／学問』紀伊国屋書店，84 ページ，また 87 ページ.

11　G. ヴィーコ『新しい学の諸原理 Principi di Scienza Nuova』, Napoli, p. 86.

12　G. N. G. オルシーニ『ベネデットクローチェ　芸術・文学批評の哲学者　*Benedetto Croce Philosopher of Art and literary Critic*』, Carbondale, 1961, pp. 18-9.

13　B. クローチェ『純粋概念の科学／学としての論理学 *Logica come scienza del conzetto puro*』, p. 120. 本書は，この論文においてしばしば引用することになるので，以下それに言及する時には，本文における場合を含めて，『論理学』と略記することにする.

14　B. クローチェ『歴史叙述の理論と歴史 *Theoria e storia della striografia*』, 9ed., Bari, 1966. p. 296.

15　同上書．またクローチェ『論理学 *Logica*』（p. 13），ここでクローチェは，「概念のフィクション」という言い回しを導入する.

16　B. クローチェ『ヘーゲルにかんする論文 *Saggi sullo Hegel*』, Bari, 1913, P. 146.

17　J. フェミア『グラムシの政治思想 *Gramsci's political Thought*』, Oxford, 1987, p. 82.

18　G. N. G. オルシーニ，前掲書，pp. 18-19.

19　同上.

20　M. アロイージ「グラムシ，歴史としての科学と自然 *Gramsci, la scienza e la natura come storia*」，『社会 Societa』1950／9，第 4 巻／第 3 号，p. 385-410.

21　スラッファ，ジェッラターナ編，前掲書，註 1 の引用個所.

22　それでも，グラムシは，ソ連のラピドゥスとオストロヴィチャーノフの経済学教科書（QⅡQ10 §＜37 ii＞）を取り上げた際に，一つの科学／学問が「認められて勝利する」ために闘争し論争する時期」と，「科学／学問が有機的に膨張していく古典的な時期」とがあることを区別している．これは，或る新しいパラダイムが承認される時である「科学革命」の時期と，それに続いて，そのパラダイムが万人によって受容される時である「正常な／規範的な科学」の時期というクーンの概念に類似している．このような諸区別は，「パラダイム」という近代的な概念の統合的な部分となっている.

23　この点（『獄中ノート』QⅢQ10 §＜1＞, p. 1240）には，印刷上のミスプリントがあり，思い違いを引き起こす可能性がある．グラムシによって書かれている文章は，「弁証法というものであるのか，それとも正確にはどんなものであるのか，証明することに成功していない non e riuscito a dimonnstrare cosa sia dialettica o cosa sia esattamente」ではなくて，この項目の本文に再現した

とおりであって，最初の「cosa」【下線の言葉】という言葉はそこにはない．

24　J. フェミア『グラムシの政治思想』，前掲書，p. 83 から引用．

25　H. ウィルドン・カー『ベネデット・クローチェの哲学 *The Philosophy of Benedetto Croce*』, London, 1917, p. 7.（フェミア，前掲書，p. 82 からの引用．）

26　J. フェミア，上掲書，p. 106.

27　A. グラムシ，『青年期著作集』，前掲書，p. 328.

28　ガリレオ・ガリレイ「マルコ・ヴェルサー宛の手紙 *Lettere a Marco Welser*」，ジュリアーノ・トラルド・ディ・フランチア『事物とその名前 *Le cose e i loro nomi*』, Bari, 1986, p. 1; ソクラテスの引用（プラトン『クラテュロス』【岩波書店版全集第二巻】，439b）は，2 ページにある．

29　A. グラムシ，『青年期著作集』，前掲書，p. 328.

30　V. N. ヴォロシーノフについては，『社会的実践としての言語 *Il linguaggio come pratica sociale*』, Bari, 1980, pp. 143-50，『マルクス主義と言語哲学 Marxismo e filosofia del linguaggio』, Bari, 1976, pp. 78-79 及び p. 136 を参照．

31　T. S. クーン『科学革命の構造 *The Structure of Scientific Revolutions*』第 2 版（訂正版），Chicago, 1970．観察言語の非中立性については，p. 140 を参照．ニュートン力学からアインシュタインの相対論的な力学が引き出せないことにかんしては，pp. 101-102 を参照．またダルトンにかんする結論にとっては，p. 135 を参照．

32　P. ロッシ『科学のイメージ *Immagini della Scienza*』, Roma, 1975．本書のグラムシにかんする章は，グラムシ ― 科学の関係を研究しようとする誰にとっても根本的な価値をもっている．

33　B. クローチェ『批判的な会話 *Coversazioni critiche*』, Serie I, Bari, 1918, p. 229.

34　同上，p. 300.

35　F. セッラリ『量子　パラドックスと物理学的現実　*Quantum Paradoxes and Physical Reality*』, Dordrecht, 1990, pp. 345-7; S. タリィアガンベ『現代の認識論 *L'epistemologia moderna*』, Roma, 1991, p. 259-64.

36　ロンドンの雑誌『モダーン・クオータリ *Modern Quartery*』第 3／第 2 号, 1939／7, pp. 215-27.

37　スラッファ，ジェッラターナ編，前掲書，註 1 参照．

38　カルロ・ルッビア，ＴＶ第 5 チャンネルのインタヴユー，1991 年 11 月．

39　セッラリ，『量子パラドックスと…』前掲書，p. 118

40　G. トラルド・ディ・フランチア『事物とその名前』，前掲書，pp. 176-7.

訳者解説

この 8 月，イタリアのナポリにある「イタリア哲学研究所」の出版助成を受けて，ドメニコ・ロズールド『グラムシ　実践の哲学 自由主義から“批判的共産主義”へ』（文理閣）を出版した（原著：Domenico Losurdo, *Antonio Gramsci dal liberalismo al "comunismo critico"*, Gamberetti Editorice, 1997）．そのなかの主要な論点の一つに，グラムシの哲学的立場の現実主義／唯物論の確認という問題があるが，その問題にグラムシにおける「自然」の理解という側面から光を当てているのが，同じ著者の編になる別の著書に収められた論文であることを私は「訳者解題」のなかで指摘しておいた．その論文は，これまでのわが国のグラムシ研究でもあまり知られていないものであり，訳書の読者からの照会もあったので，改めて，ここに原著者の了解のもと，この誌上を借りて翻訳することにした．それがこの論文，デレク・ブースマン「グラムシ，クロー

チェそして科学」(出典；Derek Boothman, *Gramsci, Croce e la scienza,* a cura di R. Giacomini, D. Losurdo, M. Martelli, La Città del Sole, 1994) である．著者は，1944 年にマンチェスターの北 30 キロメートルほどにあるローテンストール Rawtenstall に生まれた．ロンドンのインペリアル・カレッジで物理学を専攻し，学位を取る．1978 年以降イタリアに住み，ペルージア大学を経て，現在はボローニア大学の英語学の特任教授．イギリスで物理学の学位を得ていることからも分かるように，イタリアではもともと数の少ない自然科学・技術問題にかんするグラムシ研究者である．イタリアで近刊の予定の F. frosini／G. Liguri／P. Voza 編『グラムシ辞典 Gramsci Dizionario（仮題)』Carocci 書店に，「科学 scienzia」と「技術 tecnica」の項目を寄稿しており，訳者の手元にも原稿が送られているが，残念ながらここで紹介することはできない．この辞典の企画も，ちょうどこの 7 月に，長年の論議と準備を経た国家プロジェクト Nazionale 版『グラムシ全集』の最初の巻が出ていることに見られるように，今後のグラムシ研究の新しい展開を見込んでのものと思われる（なおこの国家プロジェクト版の経緯については，本『研究紀要』1998／3 の「竹村英輔教授追悼号」所収の拙稿「イタリアにおけるグラムシ研究管見」で言及したことがある)．

グラムシにおける「自然」観の問題については，日本でのグラムシ研究の重要な基礎をおいた本学の故竹村英輔教授が，「グラムシの認識論と実在観（自然観）は，解釈がもっともわかれやすい部分で，いわば迷路をなしている」(『グラムシの思想』青木書店，1975 年，211 ページ）という言葉を残している．問題は，「物質」の概念を，「それを変える人間との歴史的関係において存在する」とグラムシが考えていることにある．そこからグラムシの「物質」の概念が，「意識」に対する「物質」の認識論的な「先在」性を否定して，「客観」と「感覚」とのマッハ主義的な原理的「同格」の立場によるものだと理解したり，あるいはそのようなグラムシの「実践的」「歴史的」な「物質」の理解は，「観念」や「感覚」を対象の「反映」と見る立場を，「古い形而上学的な唯物論」の立場として放棄するところに積極性をもっていると主張したりするような諸々の誤解を生み出すことになったからである．つまりグラムシの認識論は，「感性」からの「物質」の自立した存在（レーニン)，「意識」に対する「存在」の第一次性（エンゲルス）を主張する唯物論的な認識論ではない，というわけである．

こうした誤解は，ブースマンが引用している文章を例にとれば，「存在は，思考から切り離されては存在しないし，人間は，自然から切り離されては存在しない」(本訳の「2．グラムシとマルクスにおける科学とテクノロジー」の引用文参照）というグラムシの文章で，その前半を，一見それとは矛盾するような後半の立言から切り離して考えていることによる．人間は，たしかに「思考」を通して「存在」を認識し，それに積極的に働きかけるのであるけれども，その「思考」と働きかけは，人間の身体という「自然」に支えられており，人類の存在そのものが長い「自然」の歴史を前提とし，労働という人間の外的な「自然」との代謝の活動なしには「存在」し得ない．それが，上の文章の後半で立言されていることである．グラムシの「自然」観についての誤解が共通に前提としている特徴は，マルクス主義の哲学的な唯物論がまた，人類の出現以前の「自然」

の存在を認め（レーニン），キリスト教的な創造神をふくめたあらゆる「精神」にたいする「自然」の本源性（エンゲルス）を主張する唯物論的な存在論であるとされている論理に留意することがなかったということであった．そうした誤解はすでに早くからみられることについては，故竹村教授による批判があるが，最近のグラムシ研究にも，こうしたレーニンやエンゲルスの唯物論の立場にグラムシが否定的であったとするものは後を絶たない（片桐薫『グラムシと二〇世紀の思想家たち』お茶の水書房，1996 年，47 ページ）．

マルクス主義の哲学的な唯物論は，単に認識論的な意味での唯物論であるのみならず，また存在論的な意味での唯物論でもあり，そのような両者の不可分な一体性の上に立っている．それによってまたマルクス主義的な唯物論は，みずからを近代哲学史の総決算である地位において，その出発を確認することになった．マルクス主義的哲学は，何よりも自然・社会・精神の歴史を神の介入なしに一貫して科学的・学問的に説明しようとしたドイツ古典哲学の文字通りに世界観的な遺産の上に立っている．カントからヘーゲルにいたる「自然哲学」をめぐる諸々の試みは，自然の自己原因的な発展を体系的に追求することで，それと不可分に結びつけながら「精神哲学」という形で，人間の歴史と近代社会の形成過程を位置づける可能性を準備していった．そしてフォイエルバッハが，そのドイツ古典哲学の「終結／出発 Ausgang」の環を，ヘーゲルの「自然哲学」に見出した．マルクスやエンゲルスは，その仕事をさらに 19 世紀の諸科学と資本主義の世界史的な展開という新しい歴史的条件のもとで唯物論的に徹底し，弁証法的な運動観に結びつけることで，歴史的弁証法的な唯物論的な世界観が展開していく世界史的な哲学革命の新しい歴史的な次元を切りひらくことになった．

グラムシもまた，ドイツ古典哲学の遺産を継承しながらマルクス，エンゲルスが切りひらいた哲学の新しい世界観的な次元を，20 世紀前半のもう一つ新しい歴史的条件のもとで，とりわけガリレオ・ガリレイとジョルダーノ・ブルーノに始まるイタリアの近代的な自然論・唯物論の歴史的なサイクルを継承する課題を自らに課した．そのことは，ブースマンが指摘しているように，グラムシが，ガリレオやブルーノの名前をたびたび『獄中ノート』で挙げていることからも明らかである．

20 世紀の初め，イタリアでクローチェとジェンティーレのネオ・イデアリズムの影響下で，グラムシがヘーゲル哲学からマルクス主義哲学への探求を推し進めている頃，すでにロシアでは，レーニンが『唯物論と経験批判論』において，哲学的には主観的な観念論の一変種に過ぎないものとしてドイツの物理学者マッハの「経験批判論」に徹底的な批判を加えていた．マッハの「経験批判論」が，レーンによって取り上げられたように，ロシアのマルクス主義哲学のなかに少なからぬ動揺を生んだのは，自然諸科学，とりわけ古典的な物理学における力学的な自然観が，相対性理論や量子力学の出現を受けて，マクロコスモスとミクロコスモスとの両方の次元で，深刻な危機に陥っており，いわゆる「物質の消滅」という現象を生んでいたからであった．とりわけ新しい物理学の「不確定性原理」は，「悟性」主義的な新カント派や「理性」主義的な新ヘーゲル派を主流としたブルジョア哲学の内部にも危機を引き起こし，現象学，実存主義，プラグマティ

ズムなどの新しい観念論的な潮流を生み出すことになった．そしてそのような哲学的な世界観の全体的な「危機」は，世界資本主義があらたな世界再分割のための帝国主義への転換期を迎えていたことに連動しており，第一次世界大戦からその戦後のナチズム，ファシズムが台頭して，第二次世界大戦へ向かう時期，その頂点に達していく．ここに翻訳したブースマンの論文は，二〇世紀初頭の「科学革命」の時代に生み出された哲学的な危機への対応を，クローチェの観念論的立場とグラムシの唯物論的な立場との対立というイタリア的な視点から概観したものである．イタリアでは，グラムシの「実践的唯物論」と「自然」や「自然科学」の概念についての研究が立ち後れている状況があることは，この論文のなかでブースマンによって指摘されているとおりであり，それがまたわが国のグラムシ研究を規定している条件にもなっているので，この論文はわが国のグラムシ研究に対しても，重要な一石を投じるものと思われる．

論文が提起している論点については，すでに目次にも見られるように，論文の構成そのものが多くを語っている．「科学とテクノロジー」の関係や「実証主義」批判という重要な論点については，今では，フランクフルト学派的な問題設定を越えた検討が必要であるかも知れない．「宗教と観念論」との関係での「自然」や「科学」の概念の位置づけについても，イスラム問題から「オリエンタリズム」に関わる問題にまでわたって，展開するべき問題が今日ではさらに輻湊した形をとっていると言えよう．しかし，何よりもこの論文の特徴は，表題に表現されているように，グラムシの「実践的唯物論」の立場が，「観念」の方法論的「弁証法」や「神秘主義」に傾斜していくクローチェの「ネオイデアリズモ」の観念論の立場とは対照的に，「科学革命」を通して明らかにしてゆく「物質」の「実在性」とその客観的な「弁証法」の究明という「科学」の運動との同時代性を担保するものであったことを明らかにしていく後半の論調にある．

「自然」における「無限に小さい現象」は，「精神」から「自立」したものなのか，それとも「精神」によって「設定」されたものなのか —— クローチェ流に表現すればこのような形をとって提起された 20 世紀初頭の哲学の根本問題については，わが国でも，「哲学におけるレーニン的段階」の問題としてすでに戦前の「唯物論研究会」を中心にして多く論じられてきた（船山信一『昭和唯物論史』下，福村書店などを参照）．また戦後もいち早く永田廣志『現代唯物論』三笠書房の新版がその問題に詳しく立ち入っているし，戦前の名著古在由重『現代哲学』，『五つの省察』が戦後の『著作集』（勁草書房）に収められていたりするので，ここではこれ以上立ち入ることは差し控えてもよいだろう．

この日本での状況と重なる形で，イタリアにおけるグラムシの「自然観」をめぐる問題状況があった．このブースマン論文は，とりわけクローチェに対するグラムシの「現実主義」的な批判の視点からその問題を掘り下げてゆき，クローチェの観念論的な「自然観」とグラムシの唯物論的な「自然観」の根本的な対立を明らかにしている．もっともこの論文では，一部の自然科学の専門研究者の「自然」観の動揺との関係などを検討するなかで，クーンの「理論的負荷」問題との関係において，グラムシの認識論的な「現実主義」の優位性を承認しつつも，彼の現代自然科学についての教養における歴史的な限界や，彼の「現実主義」を担保する唯物論の歴史的総体性

への関連づけの不十分さが指摘されている．もっともその際に，グラムシがファシストの獄中に捕らえられていて市民的な自由を奪われている政治犯の立場（マルクス『経済学哲学手稿』がスラッファによって差し入れられたが，検閲によってグラムシの手に届かなかった）にあり，また支援体制にもグラムシに打撃を与えるような傾向があったし，さらに結核が重くなっていったことなど，さまざまな諸制約があったことも充分に考慮されなければならない．

グラムシにおけるこの「理論的負荷」性という論点は，クーンの提起した科学思想史の方法に関わってブースマンがクーンの議論から引き出した重要な論点である．本来は，それはそれで立ち入った検討を要する性格のものであるが，ここでのグラムシに関する限りでは，グラムシの「現実主義」と「唯物論」との関係づけをどう理解するか，という唯物論としての根本問題の現代性にかかわった論点となる．「現代唯物論」は，文中でブースマンがエンゲルスの文章を引いているグラムシの立場を論じているところに見られるように，古代の「自然学」以来のながい「物質的一体性」や「自然の本源性」を総括することによって「理論的負荷」を受けた「現実主義」の立場に立っているのであって，けっしていわゆる「白紙」の「現実主義」の立場に立つものではない．その点からすると，グラムシは，「実践の哲学」の客観性の決定的な保障の一つとして，哲学的な「遺産継承」問題を挙げていることは，「理論的負荷」問題について十分に自覚的であったわけであり，グラムシの「実践の哲学」は，個別的な言及における表現の不足から印象づけられるような，単に直接的な「現実主義」というだけではなく，言葉の十分に豊かな意味においての現代的な唯物論の「理論的負荷」の磁場に立っていた「現代的な唯物論」であったと言わなければならないのではないか？

ここでグラムシの「実践の哲学」が「唯物論」の立場の哲学であったことを確認しておくことが必要である．と言うのは，とりわけ現代の哲学の状況を考える上で見逃せない問題として，グラムシの同時代者であったハイデガー［1889-1976］の思想史的な位置づけの問題があるからである．ハイデガーは，『存在と時間』を書いた後，ハイデルブルク大学の学長に就任，その哲学の「存在の政治学」をナチズムへの深いコミットという形で行動化したことは，わが国でも今ではよく知られている（V. ファリアス／山本訳『ハイデガーとナチズム』名古屋大学出版会，R. ウォーリン／小野他訳『存在の政治』岩波書店,）．学長退任後，後期のハイデガーの哲学は，マッハ主義の影響下の「現象学」的な関心のもとで，「自然」は「イデアとしての存在」に取って代わられるという形で，「本質 ― 存在 Was-sein」の「事実 ― 存在 das Sein」に対する圧倒的な優位を主張するようになる（木田元『ハイデガー『存在と時間』の構築』岩波現代文庫,）．それは，プラトン以前に存在とは何か，を問うことで哲学を始めたギリシャ「自然学」の全系譜を「哲学」の歴史からはずし，プラトン的な「形而上学」の歴史でもって，正統的な哲学の歴史とする見解を導き出すことになった．その評価によれば，レーニン『唯物論と経験批判論』における「唯物論」の定義化の試みは，スターリン主義を正統化する哲学的な罠であったとされる（木田元『反哲学』講談社学術文庫）一方，ナチズムへの哲学的な関与を終生変えなかったハイデガーの観念論的な「存在論」には，世界哲学史的な正統性が与えられる構図になっている．スターリ

ン主義は，たとえば，官僚的行政的な指導による社会主義化と一党独裁を徹底して，過渡期社会の生み出す客観的な社会的・政治的諸矛盾を機械論的に抹殺する反唯物論的な政策によって生み出されたものであって，すでにこのような傾向に対しては，グラムシの批判がある（たとえば「アメリカニズムとフォーディズム」におけるレオーネ・ダヴィドヴィ【トロッキー】の「軍隊的」な「強制」方式の批判を参照，QⅢ，Q．22，§＜11＞，2164ページ）．グラムシの「自然」観，唯物論の問題は，このような論調の根源となっているハイデガー的な哲学史の書き換えと対決すべき「同時代的な」課題としても，位置づけられ直す必要があるのである．

このハイデガー的な反唯物論の立場からの哲学史解釈を正当化する反動的な文脈が出現している下で，ぜひとも思い起こしておかなくてはならないのが，1996年のアメリカでの「ソーカル」事件である．ニューヨーク大学物理学教授アラン・ソーカルがポスト・モダンに愛好されるエセ科学用語を使って，デリダ，フーコー，リオタール，ラカン，クリスティーヴァ，イリガライ，ボードリアール，ドゥルーズなど，日本をはじめ世界的な哲学市場を席巻する観のあったフランスの現代流行哲学者たちに共通しているのが，最近の数学や物理学などの精密自然諸科学の不可知論的な盗用や誤解であることを暴露した事件である．自然諸科学における「物質」の客観的存在の相対化，主観主義化という点では，ハイデガーの立場を引き継ぎ，新自由主義的な「存在の」政治化・倫理化に傾斜したポスト・モダンのチャンピオンたちに対して，アメリカの物理学者ソーカルが加えた徹底的な批判は，哲学的には，20世紀初頭のレーニンのマッハ主義的経験論に対する唯物論の批判の立場の21世紀的な継続であった．「ソーカル」事件については，わが国でも金森修『サイエンス・ウォーズ』（東京大学出版会，2000年）に詳しい紹介があるし，またその後ソーカル自身がベルギーの物理学者ジャン・ブリュクモンとの共著『知の欺瞞　ポスト・モダン思想における科学の濫用』（岩波書店，2000年）を出しているのだが，わが国でも，国際的に見ても，ポスト・モダンの思想の代表者を含めて，ソーカルの批判に対するまともな反論は一つもなく，「事件」の結果は，ポスト・モダンの側の完敗，もしくは惨敗に終わっている．ポスト・モダーンが，アメリカ型新自由主義の効率主義や自己責任論に寄りかかった「科学主義」に立っていた以上，この「事件」は，はしなくも「アメリカの終わり」(F. フクヤマ）を予兆する「政治」的な事件であったが，またその議論がハイデガー的な「存在の政治」化的な原理の後産に関わるものであったことからすると，きわめて倫理的な「認識論」的な事件でもあったと言える．さらには「科学哲学」が，この間，「論理実証主義」の「終焉」の経過をはらみながら，「自然主義」と「反自然主義」とへの分化を顕著にしていることも，「ソーカル事件」の反応のひとつであった（『哲学の歴史　論理・数学・言語』第11巻，中央公論社，2007年，門脇俊介『現代哲学の戦略　反自然主義のもう一つ別の可能性』岩波書店，2007年）．

問題は，この問題に対して，現代唯物論の哲学の側からの反応があまりにも乏しい（これについては，拙稿「『大学の危機』と『哲学』の『古典』」，『哲学と現代』2007年，第23号が，管見に入った限りでの一つの例である）ことである．反唯物論的というに止まらず，ハイデガーのナチス的な「存在の政治学」の視点を正当化するような世界哲学史の書き換えを容認することなど

は，およそ現代哲学のスキャンダルの最たるものであろう．哲学の根本問題をめぐるこのような今日の「哲学」一般の反動的・退行的な無反応は，このこと自体が，残念ながら，大きな転換期にさしかかっている 21 世紀の現代に対する思想的な責任を引き受ける上で，いまや「哲学」が大きく立ち後れているという危機的な状況を反映した形になっているのである．

21 世紀の今日，大量の核兵器が数少ない大国に独占的に温存され，石油をはじめとする資源をめぐっては戦火が絶えず，地球温暖化や食糧問題から，ワーキングプアや世界的な格差問題に至るまで，総じて 21 世紀に入って深刻な人類生存にかかわるようになっている問題は，すべて「自然」の本源性に結びついている．人間を含むすべての「生命」や「自然」をもっぱら「資源」，「素材」としてだけ扱うのは，「存在の政治学」によってナチズムに結びついたハイデガー的な「形而上学」だけとは限らない．それは何よりも，人類の生活過程を営む地球を，すべて資本の増殖過程に従属させ，ブルジョワ的な「効率」と「利潤」の「世界市場」を独壇場とする「新自由主義」そのものにとっての「形而上学」となっているからである．「自然」の本源性にかかわる哲学の根本問題とは，けっして認識の客観性を保障する認識論的な問題であるというにとどまらず，地球と人類の存続そのものを担保する存在論的な根本問題でもあるのである．

ブースマンのこの論文は，すでに 10 年以上前のものであり，著者としてはすでにおおくの書き足りない点を感じているようである．ビッグバン宇宙論のように，20 世紀初めの相対性理論や量子力学の一体的な把握と深化が問題化し，さらにはダークマターやダークエネルギーなど未知の宇宙物質の存在が問題になっている状況のなかで，自然科学史・宇宙論史といった視点から，グラムシの「自然」観や「従属階級」観の地球史的意味のさらなる可能性を，近代思想史的に探究する試みもあって好いのではなかろうか？　いずれにしても，さしあたりはここでブースマンのこの論文が提起しているグラムシの「自然」観問題の重要性の確認から，21 世紀の「哲学の根本問題」を出発させるという課題そのものは，たんにグラムシ研究や唯物論哲学にとってのみならず，今日の哲学一般にとっても，依然として新しいものであると言わなければならない．

［追記］この原稿を送稿した後で，日本の理論物理学者三名が本年度のノーベル物理学賞を受賞することになったと，報じられた．そのうちの一人である益川敏英京都産業大学名誉教授には，1970 年代のこと，本学の非常勤講師として「自然科学概論」を担当していただいたことがあり，受賞の発表後，当時の小集団による「ゼミ体系」などに関わって，本学の自由な学風を回想されたりしている（『毎日新聞』など）が，卒業生のなかにも，その当時の先生の個性的な講義を記憶している人も少なくはないはずである．それに関連して，以下のことを書き加えておきたい．

湯川秀樹，朝永振一郎以来の日本の理論物理学の伝統は，20 世紀の初め，マッハ主義的な「自然」の不可知化・観念論化の論調に惑わされることなく，「物質」の存在の探求に向かうことで，今日の理論物理学の標準理論を作りあげることに成功してきた．湯川が「中間子」の存在を予見して，「クォーク」の階層を自然のうちに発見する端緒を切りひらいたのは，1934 年のことであった．後に湯川は，菊池正士『物質の構造』（1948 年）の書評で，「微視的現象における時

間空間的記述」の困難が主張されていることに対して，「認識の問題の裏には必ず存在の問題がある」とする自分の主張を対抗させるが，まさにこの「存在の理法」に立つ（湯川秀樹『目にみえないもの』講談社学術文庫，135 ページ）ことで，相対性理論と量子力学との接点のところに存在する「目に見えない」ものについて，最新の唯物論的な回答を与えたのであった．湯川のもとで，また湯川とともに，その研究を理論的・実験的に支えた坂田昌一は，湯川の仕事がマッハ主義的な実証哲学に対する根本的な批判であったことについて，つぎのように書いている．「当時の学界を支配していた実証主義哲学は，湯川理論を貫くたくましい方法論 —— 新素粒子の導入を真っ向から否定するものであった」．「わが国では湯川理論が提唱された直後，武谷三男博士によりその方法論的異議を捉えた三段階論が展開され，実証主義の霧を取り除き，学問の正しい発展の方向を見通す努力がなされた」(坂田昌一『科学に新しい風を』新日本新書，1966 年，179-180 ページ)．

湯川は，哲学的に表現すれば，菊池正士などがまだマッハ主義の「認識論」主義的な不可知論の限界に止まっていた限界を，「存在」論の立場で突き破り，自然の新しい本源性の次元を切り開いて，20 世紀の新しい「科学革命」の一ページを記すことになったのであった．ところがほぼ重なる時期，ハイデガーに「無」の論理によって影響を与えて，その「本質 — 存在」を「事実 — 存在」に優位させるのに影響したとされる田辺元の哲学の場合には，その理論的な展開は，ちょうど湯川の研究方向とは逆になっていた．田辺は，いったんは 1930 年の岩波講座『物理学及び化学』には，「新量子論によって考えられる物質波そのものは充分決定論的に規定せられる」(「新物理学的世界像の意義」，『田辺元全集』第 14 巻，岩波書店，233 ページ）と書いているのだが，1935 年に警察幹部講習会で講演した折には，「物心の関係」という「哲学の最も困難なる問題」においては，「物心一体」の見地，つまり「物事は研究すればするほど矛盾が出て来て，遂にどの考へも否定」されて，その「無に帰したところで働き出す」見地に立つべきであり，それが「量子現象」を通しても正当化される帰結だ（「科学思想について」1935 年，同上書，310-311 ページの各所）とする．「新物理学」であたらしい物質の存在の形式の客観性を確認したはずの自然科学観を，「物心一体」という「無」の論理に転換してしまうこの田辺の立場は，「目に見えない」存在の「客観性」と，それを確認するための手段や「理論的負荷」にかかわる「主観性」の問題とを混同してしまっているのである．その結果田辺は，アインシュタインの「一般相対性理論」を「マッハの思想の発展的帰結である」としていたかつての観念論的な解釈（「新物理学的世界像の意義」，226 ページ）の枠内に立ち戻ってしまうのであるが，哲学の根本問題を曖昧にしたこの田辺の哲学の反動化は，これはまたこれで政治的に見れば，明らかに時局に迎合してハイデガー流に「存在の政治学」を実践することでもあったわけである．田辺は，「難局」を乗りきり，「全体」の法則性を活かすために，内的矛盾を「無」化する必要を説いたのだが，時あたかもこの種の「無の論理」は，治安維持法と「国体明徴」化によって国内の異論や批判を圧殺する天皇制国家の侵略主義的な総動員体制を正当化するイデオロギーを提供することになった．これに対して，1932 年 10 月に「唯物論研究会」が創立され，「中間子」仮説が提唱される

段階以降の物理学をはじめとする自然諸科学の国際的な動向を追い，「新唯物論の立場」(三枝博音，『唯物論研究』 創刊号，1932 年）から，「社会における自然科学の役割」(戸坂潤，同上）を不断に深化させ，侵略戦争に向かう日本の政治と思想に抵抗する文化的な橋頭堡を築いた一時期があったことの思想史的な重要性は，いくら強調しても強調しすぎることはないと思われる．そのなかで戸坂は，「理論的な負荷」の問題に通じる論理的・範疇的な「共軛」の問題を提起したり，「実践的唯物論」という唯物論の特徴づけをわが国で最初におこなったりするさまざまな試みを展開するが，38 年，この「唯物論研究会」は弾圧によって解散に追い込まれ，その主要メンバーは，治安維持法によって検挙された．敗戦をすでに予見していた戸坂潤は，敗戦の一週間前にした 45 年 8 月，無残にも獄死に追いやられるのだが，この間のこうした日本思想史・唯物論史の詳細に立ち入るためには，稿を改めなければならない．なお湯川が「パイ中間子」の理論を構想するに際して，素粒子研究ではイタリアの物理学者エンリコ・フェルミ Enrico Fermi (1901-1954) に『科学研究 Ricerca Scientifica』 などに発表される先行諸論文があることを知り，それを機会に，通勤の車中でイタリア語の独習を始めたというエピソードが 1935 年 1 月 16 日の『日記』 に記されている（，小沼通二編 『湯川秀樹日記』 朝日選書，2007 年，184 ページ)．このように，「新物理学」の哲学の根本問題をめぐって湯川と田辺との立場が逆行し，湯川がイタリアの物理学とその成果を報じるイタリア語に関心を持つのは，イタリアのファシストの獄中にあったグラムシが，病に苦しみながらも，なお最終の力を振り絞って，その 『獄中ノート』 に取り組んでいる時期のことであった．

(08／11／30)

＊　この論文では，グラムシ 『獄中ノート』 がしばしば参照されているので，その簡単な紹介をしておきたい．

「1929 年から 1935 年にかけて，グラムシは獄中で，自分で言うところの「覚書とメモ」とを作成した．それは，さまざまな形式のノート 29 冊になった（学校用のノート，記録用ノート，簿記用ノートなど)．扱われているのは，長短さまざまな文章で，通常はパラグラフの記号が，またしばしば表題が付いている．1932 年の春からは，グラムシは太いペンの線で，それまでに書いてきたもののある部分を抹消したり，書き写したりしはじめる．見直され，しばしばは拡張され，まとめられて，彼自身が「特別」と呼んだ専門論文用の何冊かのノートができていった．こうして，『獄中ノート』 は，「雑録 miscellanei」と「特別」とに分けられ，最初の草稿のテキストから成る「メモ的な覚書」が，批判版の編集者ヴァレンティノ・ジェッラターナ Valentino Gerratana の命名によれば「テキスト A」とされ，二番目の草稿から成る（「特別」のテキストにある）ものが「テキスト C」とされている．こうした二つのタイプのテキストに，第三のもの，「テキスト B」が加わるが，これはただ一つの草稿しかないもので，「雑録」のなかにも，また「特別」のなかにも入っている．(D．ロズールド 『アントニオ・グラムシ』 の奥付から引用．)